

三十三年の友情

上海師範大学文学院教授

(元神奈川大学中国語学科客員教授、

ミズーリ大学客員教授)

嚴 明

人との出会いには、何かしらの縁が感じられる。幸運にも出会って知り合い、そこから育まれていく友情はかけがえないもので、会った後にも、心の中に深い感謝の気持ちと懐かしさが残される。

山口先生と出会って、これまで友人としてお付き合いいただき、まるまる三十三年になる。人の一生の内、三十三年とはかなり長い時間である。しかもこの友情を紡いだ期間は、我々が青年から中年になるまでの黄金時代に当たっている。山口先生との思い出は、数え切れないほどだが、そのどれもが、今でもまるで昨日のこのように、懐かしさと共に鮮明によみがえって来るのだ。

山口先生との出会いは一九八四年の夏休みの後だった。私は当時北京師範大学の中国語学部勤務していたのだが、ある日、学部長に呼ばれ、日本から来ている研修教師に、蘇州語を教えるようにと言われた。当時、北京

師範大学の中国語学部で生粋の蘇州人は私一人だったので、私に白羽の矢が立ったのである。そうして、その研修教師というのが山口建治先生だった。山口先生は当時北京師範大学で、著名な民間文学学者の鐘敬文教授について学ばれており、明代清代の民俗歌謡や蘇州評弾に興味を持ったので、蘇州語を習いたいと思われたのであった。これが山口先生と私が知り合ったきっかけである。初めてお会いした時、山口先生は、中肉中背のややがっしりした身体つきで、すこし巻き毛気味の黒髪が耳にかかっており、丸顔に、はにかんだような笑顔を浮かべていた。目は大きくはないが、きらきらと輝いており、言葉は少ないが率直さが感じられ、その狭い部屋にはビール瓶が沢山転がっていたのを記憶している。

多くの日本人男性と同様、山口先生は初対面の時は、やや堅苦しい感じだったが、付き合っていくうちに、実直な性格とユーモアあふれる語り口が現れてきた。そして、この山口先生のお人柄により、私たちの蘇州語の授業も愉快で和やかなうちに進み、また先生と私の数十年に渉る友情の基礎が築かれたのである。

一九八五年春、私は故郷の蘇州に戻り蘇州大学に勤務することになった。山口先生もすぐに蘇州にいらつしやり、引き続き蘇州語を勉強され、蘇州で評弾を実際に鑑賞したり、江南の風俗習慣を肌で体験したりされた。太湖と一緒に観光した時、山口先生は「この山水は私の故郷のものとそっくりですよ」と言われた。蘇州人の私は、この言葉に大変感動した。そして、忘れてはいけないのは、この時、山口先生は愚息嚴公泰の初めての写真を撮ってくださったこと。といっても、愚息は母親のお腹の中だったが。

これが山口先生の初めての蘇州訪問だったが、その後、先生はほぼ毎年のように蘇州を訪問されて、長期にわたって蘇州評弾と江南地区の民間伝説の研究を続けられた。先生が蘇州にいらつしやる度に、私たちは会った。

その後、神奈川大学の吉川、鈴木、大里諸先生も相前後して蘇州を訪れ、皆で現地取材したり、お酒を飲んだり、研究の成果を語り合ったり、と、打ち解けて楽しい時を過ごした。

一九九四年四月から一九九六年三月まで、山口先生のお招きにより、私は神奈川大学外国語学部中国語学科で二年間客員副教授を勤めさせていただいた。これが、私が日本の大学で教鞭を取った最初であり、神奈川大学ではいろいろな友人ができ、また日本各地を観光で回った。中でも印象が深いのが、山口先生と一緒に参加した仙台で行われた日本の中国学会の時の思い出である。

山口先生の母校である東北大学には、先生のさまざまな青春の思い出が残されていた。学会が終わったあとの夜、山口先生は私を誘って東北大学の裏門から通じる商店街に行った。先生は、ある居酒屋のおかみさんを探したいと言った。我々はしばらく商店街を何度も行ったり来たりしてみたが、山口先生の言っている居酒屋は見つからなかった。もちろん居酒屋のおかみさんにも会えなかった。歲月人を待たず、居酒屋はなくなり、美しかったおかみさんもどこかへ行ってしまったのだろうか。街灯に照らされた山口先生のがっかりした表情を見て、私も心を動かされた。南国四国からこの東北地方の大学に進学した山口青年は、その居酒屋で青春のひと時を過ごしたのである。おかみさんもきつとおしゃべり上手で気のいい方で、うれしい時も悲しい時も、笑顔で山口青年を迎えてくれたのだろう。おかみさんの容姿について、山口先生は何も語らなかった。私はもちろん知る由もない。ただおかみさんが、この青年学生の心にこんなに多くの温かい思い出を残し、こんなに長い間懐かしく思われていたのだから、きつと知的な美人だったのだろう。人生とはそういうもので、縁があれば知り合え、縁がなければ別れるまで。縁来たれば生じ、縁尽きれば滅ぶ。人生は夢のごとし、諸相は無常なり、これこそが

古代の日本人がよく言っている「物の哀れ」というものかもしれない、と思ったものだ。この仙台行きで、我々は共に松島の絶景を見、また初代藩主伊達正宗の記念館、山中温泉などもご一緒した。これらも忘れがたい思い出となっている。

一九九六年からの二十年間は、山口先生も私も大変忙しく、会うこともそれまでのように頻繁ではなくなった。この二十年間の我々の友情を形容するのに、君子の交わりは淡きこと水のごとし、というのがびったりかもしれない。毎年会わなくとも、年賀状は必ずやりとりし、挨拶と簡単な近況を伝えるだけだったとしても、その方が反って友情がより純粹に、より深まるように感じた。我々は、それぞれの子供が生まれた頃に知り合った（山口先生は北京師範大学にいらっしやる時にご長男が生まれた）が、今、その子供達はすでに大学を卒業して、それぞれ家庭を持っている。三十三年間の友情は静かで平凡だが、一貫して保たれてきた。私の心の中には、永遠に、温厚篤実で飾り気のない性格の、率直な物言いで、正義感と責任感にあふれた山口先生のイメージが浮かんでくる。我々のこの縁に感謝するとともに、先生のこの長きにわたる私に対するさまざまなご支援、そして楽しい思い出に対して感謝したい。

我々の人生に三十三年が三回あつてほしいと切に願う。そうすれば、次の三十三年の内には二人とも退職して、また長くお付き合いを続けることができる。そう、我々の友情は生命の終着点まで紡ぎ続けられる。山口先生、そうではありませんか。本当に、心の底から感謝しています。

（日本語譯者…山本景子 東京大學博士、上海師範大學客員教授）

人生能有几个三十三年？

上海师范大学文学院教授

（曾任神奈川大学中国语学科客座教授、

现任美国密苏里大学教授）

严 明

人的相遇与相识、冥冥之中是有缘分的。有缘相识是一种福分、而友情更值得珍惜、而当曲终人散之后、内心留下的则是深深地感恩与思念。

我和山口老师从最初相识、成为朋友一直延续到今天、经历了整整三十三年。对人的一生而言、三十三年是相当长的一段时间、何况这是我们从青年到熟年的一段黄金岁月。其中无数的点滴记忆、至今历历在目、在内心编织成漫长的美好回忆。

记得是在一九八四年的暑假后、我当时是北京师范大学中文系的青年教师、有一天接到系主任布置的一项任务、给一位日本来的进修老师讲解苏州话。当时整个北师大中文系教师中只有我是正宗的苏州人、而那位日本进修老师就是山口建治先生。山口老师当时来北师大、主要是跟着著名民间文学专家钟敬文教授进修的、因为他对明清民歌

及苏州评弹感兴趣，所以想到要学习苏州话。正是这种缘分，让我在北师大认识了山口老师。当时对山口老师的第一印象是中等身材、较为壮实、微卷盖耳的黑发、圆脸上露出羞涩的笑容、眼睛不大却很聚光、话语不多却很率直、宿舍不大却堆满了空啤酒瓶。

正如不少日本男人那样，山口老师初见面时举止行为略显拘谨，但交往一段时间后，就显示出纯朴的性格与幽默的谈吐，这使得我们的苏州话教学课显得气氛活泼和心情愉快，也奠定了我们之间延续数十年交往友谊的基础。

一九八五年春季，我回到家乡苏州大学任教。山口老师也随即来到苏州，继续学习苏州话、实地观赏评弹表演、访问江南民间习俗，并在游览太湖时感叹……这里的山水真像是我的家乡！这句话让我当时很受感动，因为我是苏州人。值得一提的是，山口老师当时还拍到了我的儿子严公泰的第一张照片，尽管他当时还蜷缩在妈妈的肚子里。

那是山口老师第一次访问苏州，之后他几乎每年都来苏州采访调查，并长期进行苏州评弹及江南风俗传说的研究。每次来苏州，我们都会见面。后来神奈川大学的吉川、铃木、大里诸位老师也都先后来访，大家一起采访和喝酒、交流研究心得，其乐也融融。

从一九九四年四月到一九九六年三月，山口老师邀请我到神奈川大学外国语学院中文科担任了两年的客座副教授。这是我第一次到日本的大学任教，在神大结识了许多好朋友，也参观访问了日本各地的风景名胜，其中印象最深的、是和山口老师一起去仙台参加全日本的中国学会的大会。

仙台的东北大学是山口老师的母校，那里留下了他的许多青春印记。记得那天会议结束后的傍晚，山口老师拉我一起去东大后门的商业街，寻找一座居酒屋的老板娘。我们在小街道中穿梭了许久，还是没有找到那家居酒屋，更没有看到那位居酒屋老板娘。岁月已经过去了许多年，当年的居酒屋和美丽的酒娘、或许都已经人去楼空，难觅

芳踪了。看到站在街头灯光下的山口老师略显失落的神情，我顿时很受感动。想当年来自南方四国的年轻的大学生山口君，曾在这里的居酒屋留下多少青春的欢乐与眼泪。甚至可以想象得出，那位仙台居酒屋的老板娘应该是多么地能说会道、善解人意。而年轻的酒客则因感受到粹（意气）而得到慰心。至于她的长相风姿如何，山口没说，我当然不知道。但她让青年学生心中留下许多温暖的回忆和长久的眷念、因粹而慰，所以一定是一位知性美人、是天使的化身、是安抚男人心灵创伤的母性象征。人生就是这样，缘分来了就相识，缘分去了就分别，缘来幻生，缘尽幻灭，人生如梦，诸相无常，这或许就是古代日本人常说的“物之哀”吧。那次我们还游览了仙台的松岛美景、初代藩主伊达政宗的纪念馆、山中的温泉，这一切都让我留下了终生难忘的美好印象。

从一九九六年以来的二十年，我和山口老师都很忙碌，交往也不像以前那么密集了。君子之交淡如水，或许就是近二十年来我们之间友谊交往的贴切比喻。不一定每年都见面，但是年末总是有一张明信片寄来，简单的问候、淡淡的话语，更显出纯朴的心境和纯净的友谊。我们从孩子出生时相识（山口老师到北师大进修时大儿子刚出生），到现在孩子大学毕业成家立业、三十三年间的交往是平静而平淡的，但是始终如一、持之以恒的。在我心中，永远有一位长相憨厚、性情纯朴、说话率直、富有正义感和责任心的山口老师形象。我感恩我们之间的机缘相缘，也感谢山口老师长期以来给我的很多帮助和快乐。

我祈盼我们的人生都有三个三十三年，这样在下一个三十三年中，我们都退休了，我们还可以长期交往，继续我们之间的纯朴友谊，直到生命的终点。山口老师，你同意吗？真心地谢谢您！